

素晴らしい須走を知りたい！

「素晴らしい隊」養成講座 第6回講座概要

第1部：須走地区を歩く須走学

座学「須走地区の歴史や文化資源について」

- 日時：平成30年12月9日（日）9時25分～10時25分
- 場所：須走地区コミュニティセンター
- 講師：樽林 一美 小山町文化財保護審議委員会 委員長



- 巡拝の道とは何か概要説明
- 第1回～第5回講座概要の振りかえり
- 巡拝の道映像：「須走 富士浅間神社」、シャトルバス内(帰り)の映像
- 講義概要

1. 須走地区の歴史や文化資源について

- 御厨(御殿場・小山)のキーワードは古代・中世は「境界」。東海道が通っていたが、信州・甲州へ行く道が御厨から分岐していた「交通の要衝」。それはなぜかと言うと、籠坂峠と足柄峠があったから。
- 中世には足柄峠の西と東では全く文化が違う。古代には足柄峠より東の地区は東夷(あづまえびす)が住んでいるみたいな土地だという認識が広がっていた。足柄峠の西側は都の文化が及ぶ最先端の場所だった。御厨の中でも交通の要衝として一番大事な場所が竹ノ下と須走。古代から中世にかけて御厨で起こった、今でいう新聞に載るような事件や出来事はここが境界であったために起こった事件。
- 富士の巻狩がどうして御厨で行われたか調べると、その前に那須野でも行われている。そして三原(今の軽井沢付近)でもやっている。そしてここ富士藍沢の巻狩。それは源頼朝が鎌倉に幕府を開いて、1番先に考えたのは、鎌倉を守るには東北との境、信州の碓氷峠を守ること、足柄峠を守ること、この3つを押さえれば、外から来る敵には大丈夫だということ。地形、文化を覚えさせようという事で、全部の御家人を引き連れて、この3箇所巻狩を行った。
- 御厨は、交通の要衝でもあり、境界でもある。境界ということは、経済、文化全ての境界でもある。そういう意味で須走はとても重要な土地だった。その証拠として、江戸時代、御厨から関東地方に入るにあたって関所をたくさん作らせる。御殿場から乙女峠を越えて箱根を通過して関東地方に入るルー

トには仙石原の関所。足柄路には矢倉沢の関所。藍沢川沿いに下ると谷峨の関所。山梨県の方から山を越えて相模に出る道には川村の関所(今の山北町の安度)。もう一つ、須走役所。十分一役所と言っていた関所。今の浅間神社の参道になっているT字路の所にあった。

―須走の十分一役所は江戸時代になって初めてできたわけではない。須走口が最初に見える資料は西暦1500年位の妙法寺記(河口湖にあるお寺の資料)の中に「関東地方で合戦があったから富士山に登る行者がみんな富士山に行ってしまった」という記事がある。その時にはすでに須走には道者を迎える施設は揃っていたと思われる。そのすぐ後、今川氏の領主であった時期(1560年か70年位)に御厨を治めていたのが葛山氏元(かざらやまうじもと)。氏元が甲斐への塩止めをやる。上杉謙信が武田へ塩を送った。「敵に塩を贈る」故事。氏元は竹之下、ぐみ沢、神山まで塩を止めろと言った。塩が集まって通っていたところが須走で、非常に重要なところ。富士山を守るための「富士山警護衆」、甲州への荷物をチェックする「須走役所」、富士山へ登る人たちから入山料を集める「須走道者関」があった。江戸時代にも入山料を取っていた。中宮役所で山役銭を取っていた。宝永五年(1708)の指出帳に「御初尾三拾五銭」とある。

―須走は交通の要衝であり、中世から江戸時代を通して、富士山の参詣者を相手にする仕事と荷物の荷継ぎをする仕事で生業を立てていた地区。中世には今川と武田、北条の戦国大名に挟まれた地域で、いつも緊張関係にあった。戦争が始まりそんな緊張関係の時には籠坂峠、足柄峠の往来も禁止される。交通の要衝であるがゆえに、どの大名も欲しがるところ。しかし自分の領地にしてしまうと相手の大名からいつも狙われている場所。何回も合戦があり、戦国時代には5回位領主が変わっている。

2. 本日歩くコース

- ―①たき道：精進川にかかっている滝の入り口のための通り
- ―②昔、水ごりをしていた滝(滝不動)の所にあった石仏
- ―③浅間神社に行く前にある墓地。永昌寺と西寿院の墓地が残っている。
- ―④東富士病院になっている所、千体阿弥陀堂跡。千体仏が飾ってあったお堂。今残っていたら、世界遺産の構成資産になっていたもの。御殿場の大雲院というお寺のご本尊になっている。明治時代の廃仏毀釈の際、香積寺に引き取られ、その後廃寺になるにあたり大雲院に移された。
- ―⑤富士山の参詣者が泊まったり、ご飯を食べさせたりした御師がいた。どこに御師が住んでいたかの地図をお配りした。「太夫」という名前がついている17名の御師がいた。今残っているお宅があるので歩きながら確認してもらおう。
- ―⑥向富山香積寺跡

3. 是非行くべき所

―①伊奈神社：人間を神様にするという行為がある。伊奈半左衛門が亡くなった時には、御厨にとって大恩人だということは一般的に認識されていた。宝永4年11月23日に噴火があるが、小田原藩が御厨はいらないから他に土地をくれ、と伊豆や兵庫県に土地をもらい、ここを放り出した。その後、幕府の直轄地になるが、その時の代官が伊奈半左衛門。酒匂川の堤防工事にかかりっきりでここには来ない。宝永6年5月に一度巡回に来ただけ。代官をやっていた時の功績は御厨の人たちの声をよく聞いてくれた代官という印象が多かった。一番の功績は、須走に幕府が集めた高役金48万両のうち4480両を須走にだけ噴火直後に与えた。須走はそれを一番の恩義にしていたと思う。そのお金で宝永5年の夏の富士山には家並みが建ち、仕事をしている。富士山にたくさん登山者が登っている記録が残っている。1坪につき〇両というお金をくれた。家の大きさによって配られる。そのお金で街並みがすぐに再建された。幕府も馬継の宿場として、富士参詣の御師の町として、砂をよけないで、その上に

町を建てた。年貢を納めさせれば、復興したのと同じなので、その思惑と一致したのだと思う。忠順(ただのぶ)への恩義、報恩の気持ちは、御厨の復興の恩人として崇敬され、近世末から神格化運動が始まり、幕末には神に祀られることになる。伊奈忠順神格化を示す神祠の建設が見える初見は、「杉原鎌野氏ト居老人の書れたるを写」という奥書があり、解説に嘉永五年(1852)の写しとある「元禄十六年大地震及び宝永四年富士山噴火覚書」である。その中に「須走村ニテハ宮ヲ立祭る也」と見える。嘉永五年(1852年)には須走村では祠(神社)を建てていた。それが伊奈神社が見える最初の資料。その後、吉久保でこれに対抗するように、慶応三年になって「神社を建てるから寄付を募ります」という趣意書を回した。それが残っている。明治になって吉久保の水神さんに祠が建てられる。大正時代になって、それを主導した渡辺丹治という方が徳富蘇峰と相談し、水神社の境内に「伊奈半左衛門頌徳の碑」を建てる。そこに駿府の米蔵を開いたという記事を載せた。それを新田次郎が昭和になり「駿府米蔵開放説話」をテーマにした「怒る富士」という小説を書いた。これが尊敬されることになった始まり。この小説が広く読まれることにより、伊奈半左衛門は御厨ばかりでなく、宝永噴火の復興の英雄として、全国的にも広く定着している。須走と吉久保に祀られた二つの伊奈神社は、昭和三二年、合祀され、須走字下原の地に新たに建造される。三四年には神社庁・静岡県から正式な神社・宗教法人として認可された。その後、地元諸団体の尽力で伊奈忠順の銅像なども建てられ、現在も御厨の人々から地域救済の恩人として崇敬されているのである。

②スタール博士碑：スタールさんは大米谷にいつも宿を取っていた。秘書前橋さんと、大米谷で出会った東大の学生だった安田さんと3人で色々事業をしている。スタールさんは文化人類学者となっているが、日本中の千社札を集めて歩いた「お札博士」。小山町の図書館にある「安田コレクション」が1,200点以上あり、すばらしい資料がたくさんある。この碑は何回か場所が移っている。

③仁藤春耕の道しるべ(須走三味線林)：富士郡から須走まで130基建てた有名な道しるべ。角柱の正面は「かちどきを挙げて心休むるな あと眺むれば敵はかづかづ」という歌が刻まれている。側面には手指の示す方角は富士山須走方面だが、「十りぎへ四り八丁、すばしりへ十八丁」など、ごてんば、よしはら、ぬまづ、やまなか、よしだ、こうふ方面への距離が刻まれている。建碑者の仁藤春耕は富士市富士岡花守の人。明治三九年より田中新田、富士岡、間門、鶉無ヶ淵、桑崎、勢子辻、印野、滝が原、須走までの道の辻々に大小さまざまな道標を建てた。その数は百三〇基に及ぶ大事業で明治四五年に完了した。経費の全てを自費でまかなった。アクリルで作った複製が高根の中郷館にある。

第2部:体験編 「須走地区の歴史・文化資産めぐり」

■日時：平成30年12月9日（日）10時30分～11時40分

■場所：須走地区内

■講師：樽林 一美 小山町文化財保護審議委員会 委員長

その1

ーたき道

行者たちが水垢離をするための滝へ行く道。この碑は、宝暦三年(1763年)六月吉日。願主は、江戸桜本坊 大峯惣講中 北八丁堀三丁目玉屋 善平治(大峯講という講中のメンバーだった人物)。石工さんはかなり字が深いので腕がいいと思う。



ー滝不動石仏銘

精進川という地名。地名が出来た時から参詣者が精進する川だったという事が分かる。もともとはここに石仏があった。御中道内外八湖修行 権少教正 梶豊 七十七歳。梶豊さんは須走の人。碑を建てたのは、相模国足柄上郡 和田河原村 願主田代昌蔵 露木政吉。南足柄の富士講道者。富士山へ登るのとお中道もやり、富士八湖(富士五湖に加えて田貫湖、四尾連(しびれ)湖など)を回ったという記念碑を建てた場所。



ー西寿院跡・永昌寺跡

須走は火山灰が3m積もり、道祖神などが埋まったが、掘り出された古い石造仏がこのお寺に限らずある。

「南無阿弥陀仏」は六字。六字の名号。「南無阿弥陀仏」と彫られた碑は名号碑と呼ぶ。「南無妙法蓮華経」は題目碑。須走の人のお墓はほとんどが神道で「南無阿弥陀仏」は普通はないはずだが、彫ってあるのは江戸時代の号碑。六地藏も頭が無くなっているのは、廃仏毀釈の時にこういうものをみんな壊したから。



その2

一千体阿弥陀堂跡

浅間神社の境内(浅間神社が持っている土地)で、堂守は杉名沢の天然寺のお坊さんだったようだ。管理は浄土宗系のお寺、持ち主は浅間神社。江戸時代の初めの建物なので、宗教制度がちゃんとしていない時期に建てられた。廃仏毀釈の時に曹洞宗の香積寺に移された。宗派が違うのに移されたのは近かったから。そして大雲院に移った。千体仏も天然寺のご本尊も「木食但唱」というお坊さんが自分で掘ったもの。その人は、もともと仏師だったがお坊さんになり、全部で二万體掘ったらしい。五穀や十穀を食べないという戒律を自分に課して修行していた人を木食さんという。



一香積寺跡

開山さんのお墓。「向富山香積寺の墓」という石板がある。歴代宮司のお墓が残っている。全部江戸時代以前のもの。宝永噴火の時、埋まったが、全部その上に建てたわけではなく、掘り出すものは掘り出した。ここも埋まったが、掘り出した。



一須走の御師

今残っている御師と似たような商売をしているのは、旅館さん。大申・小申・米山館。全国の檀家にお札を渡しに回る。そういう人たちが中世には忍者と同じようなことをやっていたようだ。吉田の浅間さんの資料にある。ここでもそういうことをやっていたかもしれない。御厨全体が俳句が盛んだった。明治19年の新聞に「御厨の人たちはどこの村でも歌を詠めない人はいない」という記事があった。江戸時代、名主クラスの人たちが寺子屋を開いて普通の子供たちを集めて教育し、歌や俳句を教えた。歌や俳句は文字が読めないと遊べないので、寺子屋教育が発達していたので識字率もあがり、そういう遊びも流行った。御厨には、句碑、歌碑がたくさんある。

一火切地

火事が起こっても、いちいの木で延焼を防ぐようにまちづくりをした。
昔は榊はこの辺りでは育たないので、いちいの木を榊の代わりに使っていた。



富士山の世界遺産登録について

■日時：平成30年12月9日（日）11時40分～50分

■場所：須走地区コミュニティセンター

■講師：金子節郎氏（小山町学芸員）



■講義概要

- 世界遺産について間違った認識がある。自然遺産に落ちたから文化遺産を目指したという人がいるが間違い。もともと世界遺産になるためには暫定リストに載らなければならない。暫定リストに載るためには、国内の審査を経るわけだが、そのリストに上がることすらできなかった。その理由は富士山が火山としての価値が全くない。世界遺産になるためには、オンリーワンかナンバーワンにならないといけない。富士山は3776m、世界的に見ても決して高い山ではない。火山のパターンもそれほど多様にわたっているわけではなく、玄武岩と噴出物しか噴出しないというワンパターンの火山。ゴミの問題、トイレの問題もあったが、一番の問題は富士山に固有種がないということ。そこから芸術が生まれたり信仰の対象になったりしているのが文化遺産を目指した。
- 新橋の浅間神社が世界遺産になっていないのは、今回世界遺産にするにあたって構成資産25個あるが、全て江戸時代以前のもを登録した。新橋の浅間神社は御殿場線の開通によって登山口が開かれてできた神社ということで対象から外れる。御胎内も構成資産ではない。なぜかという、構成資産にするとまわりに緩衝地帯を作らないといけない。御胎内の場合は緩衝地帯を演習場に広げなければならない。防衛省と協議した結果、国防を優先したいという事で構成資産にならなかった。